

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ainu Studies : History and Current State of Ainu Collections in European Museums

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: クライナー, ヨーゼフ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003770

ヨーロッパにおけるアイヌ関係 コレクションの歴史と現状

ヨーゼフ・クライナー*

目 次

- I ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクション調査・研究の目的と背景
- II 調査研究の経過
 - 1. 情報収集
 - 2. 実地調査
 - 3. 収集者についての資料収集
 - 4. 資料整理
- III ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクション, アイヌ研究の歴史
 - 1. ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの分布とその特徴
 - 2. アイヌ関係資料の収集の歴史
 - (1) 初期収集時代
 - a. 大シーボルト
 - b. プロムホフ
 - c. A.プフィッツマイヤー
 - (2) 開港以後の植民地主義的関心からの収集・研究
 - (3) ヨーロッパでの日本展示会とその影響
 - a. ウィーン万国博覧会 (明治6年)
 - b. ベルリン国際漁業博覧会 (明治13年)
 - c. ロンドン日英博覧会 (明治43年)
 - (4) 日本民族起源論に対する興味
 - (5) 博物館による体系的収集
- IV 各博物館に収められているアイヌ・コレクションの性格……二, 三の実例
- V ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクションの特色

I ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクション調査・ 研究の目的と背景

ボン大学日本文化研究所は、昭和58年2月から3年間にわたり、ドイツ学術振興会 (DFG=Deutsche Forschungsgemeinschaft) 及びトヨタ財団から多大な研究費援

* ドイツ連邦共和国ボン大学

助を受け、ヨーロッパ各地の博物館・美術館に保管されているアイヌ関係コレクションの調査研究を行っている。この調査研究に至った第一の重要な出発点は、日本文化研究や、日本学（ヤーパーノロジー）という学問研究は日本文化を対象とする総合的な学問であるという考えであった。つまり、その学問の対象は、文字で伝えられている日本文化、主に、文学以外に、その他の口承伝統及び物質文化（その中には美術も含まれる）も含まれており、そのように考えると、ヨーロッパ各地の図書館並びに文書館に保管されている資料以外に、博物館や美術館に所蔵されているものも重要な研究対象となる。日本文化研究に物質文化からの視点を当てる事が一つの大きな起因であった。

第二の起因はヨーロッパにおける日本研究の歴史である。特に19世紀から20世紀初頭に、ヨーロッパで日本研究の基礎を築いた先学者たちは、単なる狭い範囲の文献学だけではなく、民族学・文化人類学的研究も行っており、日本に滞在する間に、そのような学問の見地から幅広い収集活動を行った。その最も良い例として、大シーボルトを挙げることができる。**Philipp Franz von Siebold (1796-1866)** はオランダ商館付医師として1823年（文政6年）長崎の出島に赴任し、6年半の滞在期間中に「日本文化に関する総合的な博物館」を設立しようという構想を持ち、約1万点近くにのぼる膨大なコレクションをオランダ本国に持ち帰った。これらのコレクションは1837年オランダ政府に引き渡された。これらを基にして設立されたライデン国立民族学博物館 **Rijksmuseum voor Volkenkunde** は世界で初めての民族学博物館となった。従って、この意味でも、大シーボルトは民族学博物館の祖とも言うことができる。従来の文学研究だけからでは、その重大な意義は明らかにならない。

第三の動因は、ヨーロッパにおける日本及び日本人に対するイメージは、日本の文学とか日本の今日的な経済的地位からも影響を受けているが、それよりも博物館、つまり博物館に展示されている物から強く影響され形成されているという点である。

このヨーロッパにおけるアイヌ・コレクションの調査研究の前段階として、昭和55（1980）年末ボン大学で中部ヨーロッパ各地の博物館・美術館の責任者を一同に集め、国際シンポジウムを開催し、紀要 **Bonner Zeitschrift für Japanologie** 第3巻として、“**Japan-Sammlungen in Museen Mitteleuropas**”（『中部ヨーロッパの博物館における日本関係コレクション』）（1981）を発表した。この席上、白熱した議論が闘わされた。その議論の重要な点をピック・アップしてみると、一つに、中部ヨーロッパの博物館における日本コレクションの歴史的な実情である。大規模な国立及び市立博物館では、主に明治から第一次大戦までの間に膨大な数に昇る日本関係コレクションを

購入もしくは寄贈されている。しかし当時日本に関する専門家はほとんどおらず、これら貴重な資料が十分な説明もされことなく未整理のまま放置された。また、私設あるいは小規模な博物館では、個人的な寄贈を通じて集められたものが多く、個人的な教養旅行で日本訪問の際に手に入れられたこれらのコレクションも、当時学芸員の不足もしくは不在の為に、いまだに学問的に調査研究がなされていない。因に、骨董屋を通じて日本から流れ込んだものは莫大な数に昇ったが、いまだに調査研究はなされていないのが実情である。さらにこれらのコレクションにとって災難だったのは戦争による被害であった。ドイツやオーストリアの博物館では、戦争中資料を分散して各所に疎開させた。従って、場合によっては資料が紛失してしまったり、又物自体がなくなってしまったことが多々生じた。これらの整理が手掛けられるようになったのは昭和40年代になってからのことである。この戦争による被害の一例を挙げると、次の通りである。

- ・ベルリン東洋美術館 (Museum für Ostasiatische Kunst, Berlin) 95%喪失
- ・ヒルデスハイム Hildesheim 市立レーマ博物館のアイヌ関係資料の喪失
- ・ワルシャワで B. ピウスツキ氏のアイヌ関係資料が昭和14年9月1日に空襲によって焼失。

以上のような歴史的な実情の他に現在の問題点として次のことが指摘できる。それは、現在博物館として使用されている建物の多くは、歴史的建築物であり、その多くが国から文化財の指定を受けており、従って博物館としての機能を十分果たすことができない。一例を挙げると、オーストリア国立民族学博物館は王宮殿の一部である。さらに近年新しく開館された博物館、例えば、西ベルリン・ダーレム国立民族学博物館(1970年開館)やケルン市立東洋美術館(1976年開館)をみても、コレクションの約2割だけが常時展示されており、残り8割は倉庫に眠っている。ヨーロッパでは常時一般に展示している一般展示よりも、特別展示会が頻繁に催される。特別展示の為に出品したものは詳しく調査されるが、その他のものは未整理のまま埋もれてしまっている。博物館の学芸員は特別展示会等の準備に追われ、これらのコレクションの調査研究にまで手が回らないのが実情である。

以上のことは中部ヨーロッパの博物館の実情であるが、このことは同時にヨーロッパ全体についても同じことが言える。この国際シンポジウムを通じて多様な意見が出され、多くの問題点が指摘され検討された。その結果、次のような意見の一致をみた。ヨーロッパの博物館に現在どのような日本関係コレクションがあるのかを総合的に把握することが出来ない。従って、ヨーロッパ各地に保管されている日本関係コレクシ

ョンの総合的な調査研究が望まれる。しかし、これは余りにも膨大な計画で、このような調査研究を行うのは、時間、予算、人材の面から考えて、その実現は難しいと言わざるをえない。

そこで、試案として全体の一部について調査研究を限ったかどうかという要望が出された。この場合問題となるのは「一部」の定義である。①品物別にするか、それとも、②地理的・文化的（時代別）に分けるのか。調査に膨大な費用と多勢の専門家を必要とするような分類の仕方は避けなければならない。そこで注目されたのは、アイヌ関係コレクションである。アイヌ関係のものは目録・記録上で他のものと明確に区別される。また、ヨーロッパにおけるアイヌ研究を取り上げてみると、ヨーロッパの民族学ないし文化人類学の歴史の中でも、大変重要な意味を持っていることがわかる。この学問的歴史のためにも興味深い結果が得られる。さらに、ヨーロッパに保管されているアイヌ関係コレクションは日本にあるコレクションより、時代的に古いものがあるのではないかを考えられる。従って、日本におけるアイヌ研究にとっても興味深い、貴重な資料を見つけ出すことができるのではないか。例えば、日本のアイヌ関係コレクションを見てみると、明治6年にウィーンで開催されたウィーン万国博覧会では、当時の明治政府がその参加に力を入れたのである（写真4）。その時出展されたアイヌ関係のものの一部は、ベルリン国立民族学博物館、函館の市立博物館、上野の東京国立博物館に保管されている。それ以外の日本におけるアイヌ・コレクションは、だいたい昭和10年代から始まっており、その数はヨーロッパのそれより多く、3万点くらいである。多数のコレクションを所蔵しているところは、次の通りである。

北海道開拓記念館（札幌）	約3,600点
白老アイヌ民族博物館	3,500点
国立民族学博物館（大阪）	3,500点
市立旭川郷土博物館	2,200点
市立函館博物館	1,850点
二風谷民族資料館	1,000点

日本におけるアイヌ関係コレクションは昭和40年代に開館された博物館に多く保管されているが、個々のコレクションに関する詳しい資料、つまり、収集された年代、収集場所、収集者、製作者名等が欠けている。

これに比し、ヨーロッパにあるアイヌ関係コレクションは、数こそ日本のそれと比べて多くはないが、合計すると1万点を越え、無視できない数である。それにオランダ・ライデン国立民族学博物館のもつ Cock Bloemhoff オランダ商館長や大シーボル

トの文政年間と幕末の二回にわたるコレクションは時代的に日本のそれより古い。また、レニングラードにある二つの博物館のアイヌ関係コレクションは、①人類学民族学博物館 Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnology 所蔵の2,197点、②ソヴィエト連邦諸民族文化博物館 State Museum of Ethnography of the Peoples of USSR 所蔵の2,569点、合計4,766点で、時代的にも17世紀からのものが集められている。その他ヨーロッパ各地の博物館には合計6,000点以上ものアイヌ関係コレクションが保管されている。その大部分は第一次大戦前、すなわち明治時代に集められたものばかりである。

ヨーロッパのアイヌ研究は、ヨーロッパにおける民族学・文化人類学の伝統のもとに、その理論的基礎に基いて体系的に収集されたものが多く、しかも、その「物」について詳しく調査がなされ、資料として残されている。その例として、次のものを挙げておきたい。

○イタリア・フィレンツェ大学フォスコ・マライニ (Fosco Maraini) 名誉教授が昭和10年代に北海道各地を回り調査収集したもの約468点。(これについては、“Gli iku-bashui degli Ainu,” Tokio, 1942 を参照のこと。)

○ウィーン国立民族学博物館所蔵コレクションの中に、ウィーン大学名誉教授 A. スラヴィク (Alexander Slawik) が昭和32年に収集したものがある。僅か7点しかないが、非常に詳しい調査資料が添付されている。

○ハンガリーのブダペスト国立民族学博物館及び西ドイツのハンブルク市立民族学博物館の所蔵するそれぞれのコレクションの中に、B. バロヒュ・フォン・バラトシュ (Benedikt Balogh von Baràthos) が大正2年から3年にかけて樺太と北海道において収集したものは、アイヌ文化全般にわたって体系的に集められている。ハンブルクに508点、ブダペストに313点ある。

○デンマークのオーフース市モェスガート先史学博物館はキルステン・レフシンク女史 (Kirsten Refsing) が1969年に収集した126点のコレクションを所蔵し、詳しい説明が付されている。

これらいずれのコレクションも、アイヌ民族・文化研究の上で貴重な資料となっている。その反対に、日本の、例えば駒場日本民芸館に収められているアイヌ・コレクションは工芸美術専門家あるいは個人コレクターによって集められた芸術性の高いものだけが取り上げられており、そういう意味では素晴らしいコレクションだが、総合的なものではない。

もう一つ特徴的なことは、樺太アイヌ関係の資料がヨーロッパのコレクションに多

いことである。樺太は日露戦争まで帝政ロシアの支配のもとにあったことから、樺太アイヌのものが比較的多くヨーロッパに流れてきている。これは日本にある、主に北海道アイヌ関係コレクションを補うことができると言ってよい。

Ⅱ 調査研究の経過

1. 情報収集

まず、ヨーロッパ各国にある100ヶ所以上の博物館または美術館に文書で連絡をとり、博物館にアイヌ関係資料の有無の確認をし、保管されている場合にはその数等について、また、無い場合には、保管されている可能性のある博物館についての情報を収集した。その結果、ソ連をのぞいて現在およそ47ヶ所のヨーロッパの博物館にアイヌ関係のものが保管されていると判明した。

2. 実地調査

得られた情報に基づき、各博物館に実地調査に赴いた。調査の際、目録あるいはカードがある場合、それを複写し、さらに他の文献資料、例えば寄贈リスト、書簡、収集家の日記、中でもカタログは貴重であるので、それらのものを収集した。次に、これらコレクションのものを一点ずつ実際に手に取り判定を行う。この判定作業は、後述するように、困難が生じ、中には判定しにくいものが多い。この判定によって数の再調整を行う。また、これらのコレクションの一つ一つについてスケッチを行い、製図作成のために測定し、カラー及び白黒の写真撮影をした。

3. 収集者についての資料収集

アイヌ関係コレクションをヨーロッパに持ち帰った収集者に関して、その詳しい資料を調査し、集めた。これによってコレクションの更に詳しい資料が得られた。

4. 資料整理

以上の調査によって得られた資料を基に、個々のコレクションについてカードを作成し、ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの総合カタログを作成出版する。現在この作業が進行中である。

以上の各調査・研究段階でもっとも問題になるのは、資料の判定である。

Ⅲ ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクション、 アイヌ研究の歴史

ヨーロッパ各地の博物館を実地調査して、これまで膨大な資料を手に入れることができた。これらの資料をまだ完全には整理し終ってはいないが、すでにいくつかの大変興味深い点を指摘できる。

1. ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの分布とその特徴 (表1及び地図1を参照)

アイヌ関係資料を保管しているヨーロッパ各国の博物館の数と、そのコレクションの点数を比較してみると、次のようなことがわかる。

トップの座にあるのはドイツ連邦共和国(西ドイツ)で、18ヶ所(もとは22ヶ所)

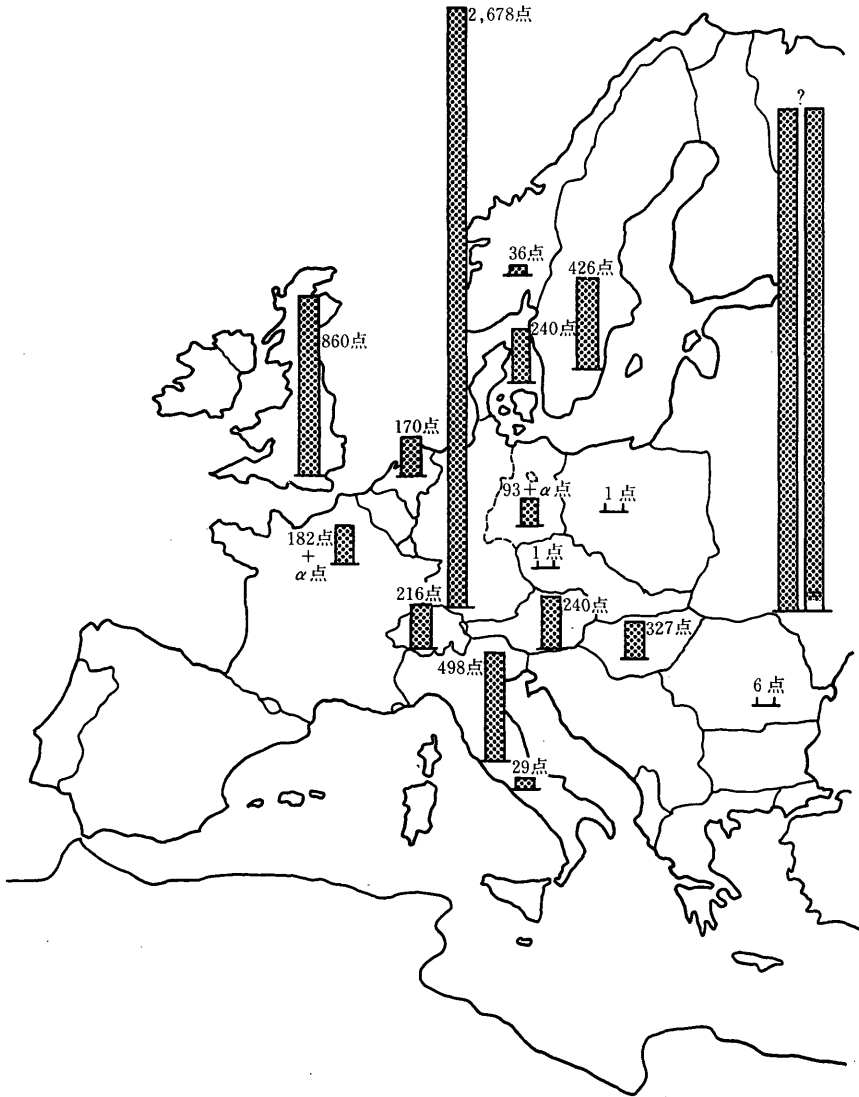
表1 ヨーロッパのアイヌ・コレクション(国別)

	目録上標本数 ¹⁾	現存ないし確認 ¹⁾
1. ドイツ連邦共和国(西ドイツ)	2,678 (44.6%)	2,211 (44.5%)
2. イギリス	860 (14.3%)	615 (12.4%)
3. イタリア	498 (5.3%)	498 (10.0%)
4. スウェーデン	426 (7.0%)	426 (8.6%)
5. オーストリア	240	208
6. デンマーク	240	238
7. スイス	216	183
8. フランス	182+ $\alpha^{2)}$	142+ $\alpha^{2)}$
9. オランダ	170	160
10. ハンガリー	327	169
11. ドイツ民主主義共和国(東ドイツ)	93+ $\alpha^{3)}$	61+ $\alpha^{3)}$
12. パチカン市国	29	26
13. ノルウェー	36	32
14. ルーマニア	6	0
15. ポーランド	1	1
16. チェコスロバキア	1	1
17. 現ポーランド統治下東部ドイツ地方	3	0
計	6,006	4,971

注1) 各博物館の目録の中で、『アイヌ』として記録された番号の合計で、標本資料の実際の数とはそれと若干ちがう。

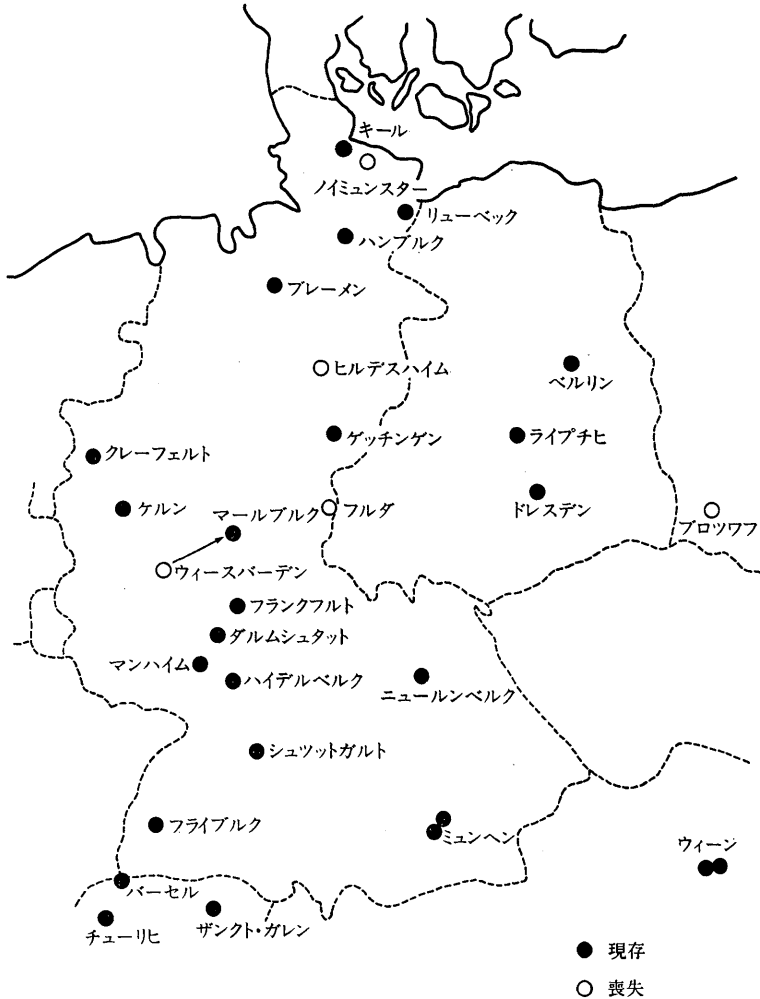
2) ベサンソン(Besançon)博物館は未確認

3) ライプチヒ(Leipzig)博物館は未確認
(表6も参照する)



地図1 ヨーロッパのアイヌ・コレクション

の博物館に計2,678点（現在は2,211点）のコレクションを所有している。これにドイツ民主主義共和国（東ドイツ）や現在ポーランド統治下にあるもとドイツの地を加えると、25ヶ所の博物館、2,774点となる。これはヨーロッパ全体のアイヌ・コレクションの約半分（44.58ないし44.47%）にあたる数である。また、ドイツ語圏（両ドイツ、オーストリア、スイス）はヨーロッパの学史上では一つのユニットをなしており、このドイツ語圏を総計すると、ヨーロッパ全体の53%にあたる、30ヶ所、3,230点（現



地図2 ドイツ語圏のアイヌ・コレクション

存は2,663点)にもものぼる。これに比べて、イギリスではこの1/4弱に当る8ヶ所、860点(現存は615点)しかない。他の国では一段と少なく、イタリア(バチカンを含む)527点、北欧圏(デンマーク、スウェーデン、ノルウェー)は表1の通りで702点、また、フランスでは僅か2ヶ所に182点(+a)だけが保管されているに過ぎない。

こうしてみると、ドイツ語圏の国々では、アイヌ民族・文化に対して多くの関心が持たれていたことが分かる。ドイツでは、ノイミュンスター、クレーフェルトなどの小さな田舎町の博物館にさえ何点かのアイヌ資料が保管されている。世界の他の民族に関するものは、アメリカ・インディアンをのぞいて、それほど多くはないのに、ア

イヌ関係に限り非常に多い点が注目される（地図2を参照）。

ここでアイヌ民族文化に関して出版された文献を見てみると、1850年から1980年までの間に出版された外国語によるアイヌ関係文献の相対数は、次の通りである。

① 英語による文献	312
② 独語による文献	228
③ 露語による文献	108
④ 仏語による文献	104
⑤ ポーランド語による文献	23
⑥ イタリア語による文献	11
⑦ スカンジナビア諸語による文献	9

[この統計は主に Norbert ADAMI 著： *Verzeichnis der europäischsprachigen Literatur über die Ainu*, Wiesbaden 1981 による]（表2を参照のこと）

これを内容別にみると、雑誌や新聞等の一般向きに書かれたものは、①独語②英語の順で、一般的な関心がドイツ語圏では高いことがわかる（表3を参照）。

次に時代別に分類すると、第二次大戦後、英語によるものが急増し（アメリカでの出版物を含む）、独語によるものが非常に少なくなっている。

ここで、独語による学術書と一般向出版物を時代的にみてもみると、一般的なものは

表2 外国語で書かれたアイヌ関係文献（1850～1980年）

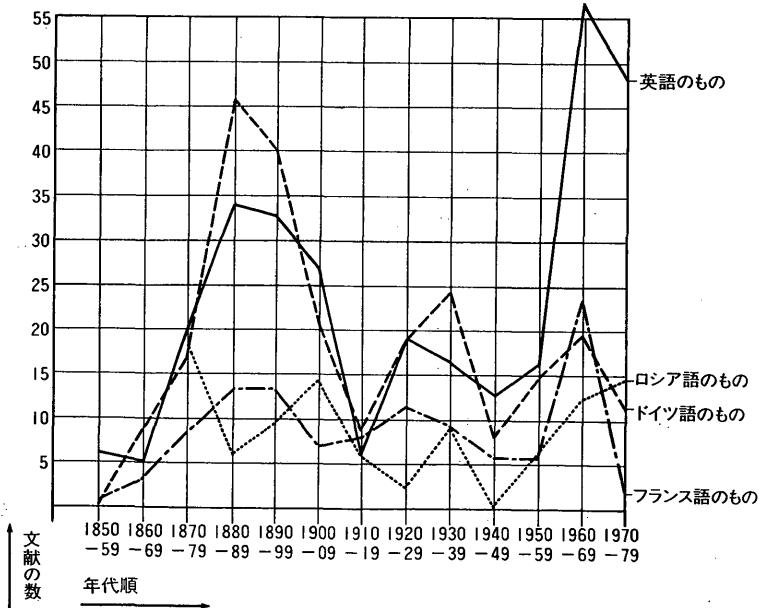
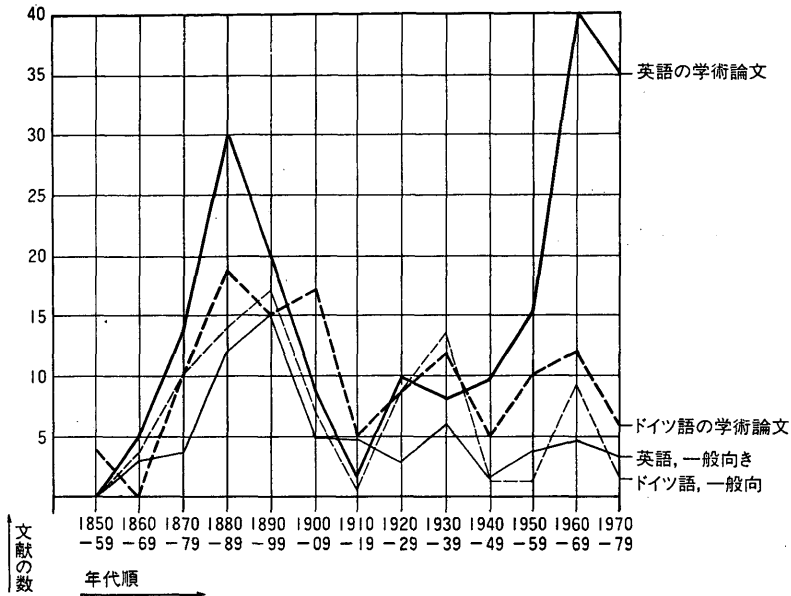


表3 英語ならびにドイツ語によるアイヌ関係文献
(学術論文と一般的読物別)



学術書よりも多少年代がおくれて出ているが、

- ・ 明治20・30年代 第1のピーク
- ・ 昭和5～15年 第2のピーク
- ・ 昭和30年代 第3のピーク

が認められる。昭和10年代に一般向出版物が学術書より多くなってきている。こうして見ると、アイヌ関係の文献の歴史は、コレクション収集の歴史と重なっている。両者は互いに影響し合っており、切り離して考えることはできない。

2. アイヌ関係資料の収集の歴史

(1) 初期収集時代

a. 大シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) は文政6-11年 (1824-1829) にかけて、オランダ商館付医師として長崎出島に滞在した。彼が日本文化に関する総合的な博物館創立のため、体系的に収集活動を始めたのは1826年であった。彼の意図したものは単に物だけの収集ではなく、その物の周辺文化を掘り出そうとした。その物を作るための材料、道具をも集め、使用方法を説明する為に、日本の絵師



写真1 オランダ・ライデン国立民族学博物館, 大シーボルト・コレクション: 千島アイヌのテンキ (1-4155); おそらく最上徳内の千島調査(天明4年)のもの。千島のテンキはその他にパリとベルリンにも保管されている。



写真2 同左: 日本の焼き物を真似た北海道アイヌの木の壺 (1-4127)

に図を描かせている。1830年オランダに帰国し、彼の著作 *Nippon: Archiv zur Beschreibung Japans* 編集のための資料とした。シーボルトが集めた物の中で、アイヌ関係の資料はさほど多くなく、81点87品目で、しかも、物だけであり、入手経路も明らかでない。しかし、これらはシーボルトの「友人」である最上徳内から手に入れたと考えてさしつかえないと思われる。そう考えると、最上徳内が寛政10年(1798年)に蝦夷調査の際に手に入れたと考えられるもの、それに、天明4年(1784年)千島調査で入手したと考えられる千島アイヌの資料がそれである。そうするとこれらの資料は、年代的にソ連を別にしてヨーロッパで一番古く、非常に貴重な資料と言える(写真1-3)。

また、シーボルトはアイヌ語に関する江戸時代に出版された辞典類を持ち帰り、多くはシーボルト自身の蔵書にし、複本のあるものはヨーロッパの各国・王立図書館に寄贈したりしている。1837年ウィーン訪問の際、オーストリア皇帝ハプスブルグ家に寄贈した『蝦夷方言藻塩草』一冊は、西ヨーロッパにおけるアイヌ語研究の出発点となった。なお、シーボルトのアイヌ・コレクションはライデンの81点以外にベルリン国立民族学博物館(1896年遺産の中から26点入手、そのうち24点現存)、ミュンヘン

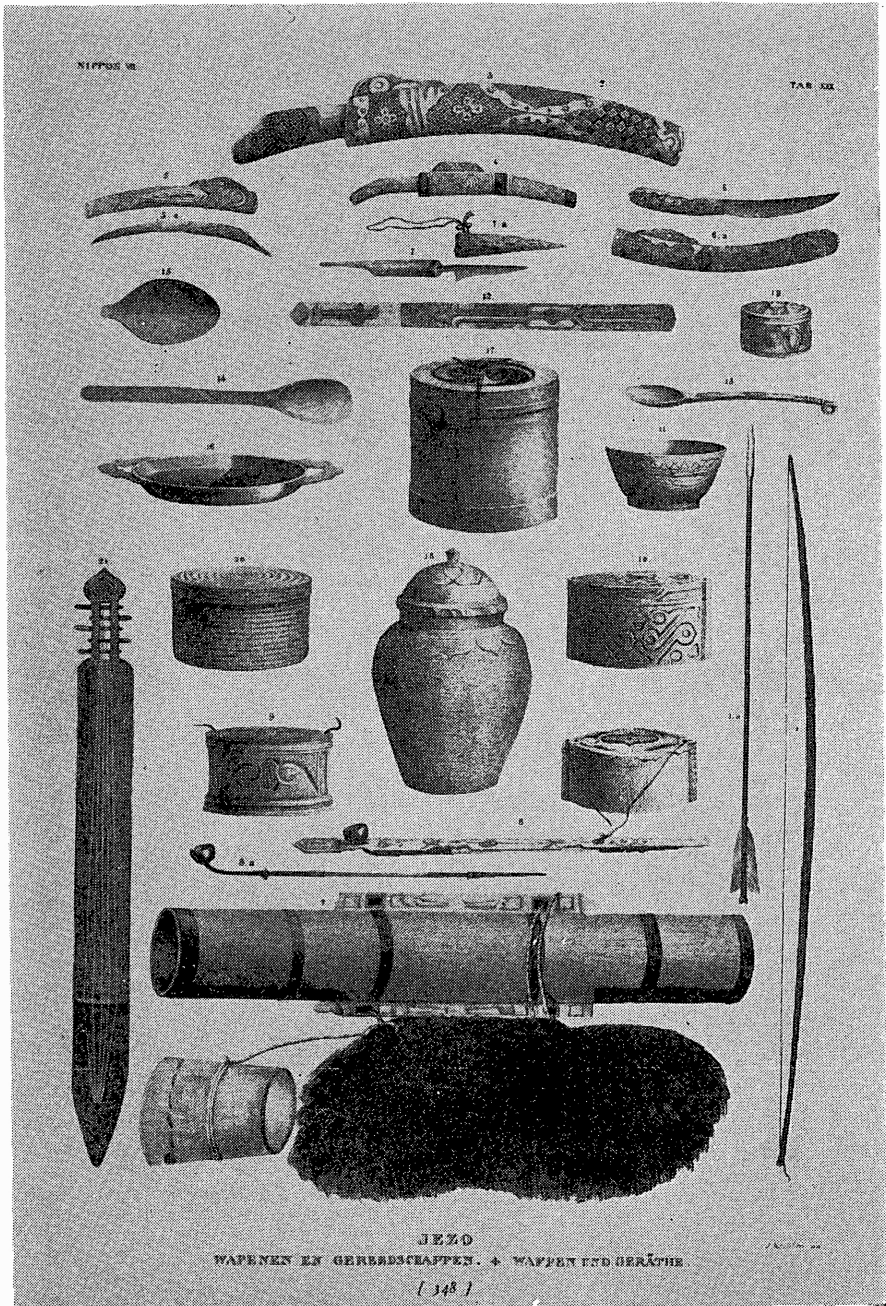


写真3 Philipp Fr. von Siebold: *Nippon* (1837) 第7巻, 第19図:「アイヌの物質文化」。そのうち11点がライデン博物館に現存する。20番は写真1のテンキ, 18番は写真2の木の壺。その他は4, 9, 15, 16, 18, 21番も確認できた。

国立民族学博物館（1872年、4点）及びマンハイム市立ライッス博物館（年代不明、2点?）にも残っている。

b. プロムホフ (J. Cock Bloemhoff)

プロムホフは19世紀初頭(1817~1822)長崎・出島のオランダ商長館を勤め、その間に集めたアイヌ関係資料37点(うち31点現存)が、デン・ハークのモーリツ (Maurits-Huis) 美術館をへて、1883年にライデン博物館に移されている。これらも時代的には古いもので、19世紀初めのものと考えられる。

c. A. プフィッツマイヤー (August Pfizmaier)

プフィッツマイヤーはウィーン学士院で1848年以降活躍した東洋研究者で、1850年代前半大シーボルトがウィーン王立図書館に残した資料をもとにしてアイヌ語に関するいくつかの論文を発表している。1854年（安政元年）ウィーンで出版した『アイヌ語彙』(Vocabularium der Aino-Sprache, *Denkschrift der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*, Phil-Hist. Classe, Bd. 5, Nr. 1, pp. 137-230) は、現在に至るまで、唯一のアイヌ語・独語辞典である。ただ、プフィッツマイヤーの仕事は、収集活動と直接関係しないのである。

(2) 開港以後の植民地主義的関心からの収集・研究

プロシヤの外交官で、初代の日本駐在公使であったマックス・フォン・ブラント

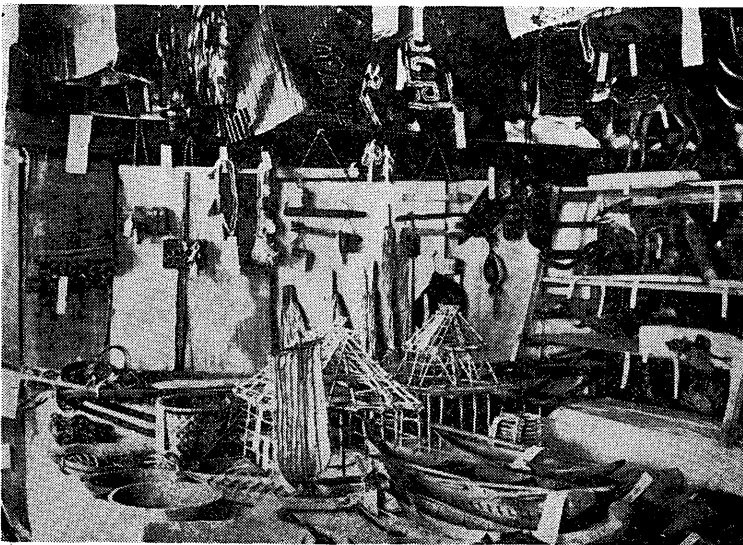


写真4 明治6年のウィーン万国博覧会の準備として、その前の年東京で開かれた大博覧会での北海道コーナー（写真はウィーン工芸美術館所蔵）。

(Max von Brandt) は、慶応元年（1865年）と慶応三年（1867年）の二回にわたって北海道南部、即ち函館から噴火湾、胆振、石狩、そして小樽から舟で西海岸を下り、福山を回り、集めた物の中のアイヌ資料52点（そのうち38点現存）を彼の父（明治元年に死亡）に贈った。そのほとんどは現在ベルリン国立民族学博物館に現存している。

ブランドの北海道視察は、北海道をプロシヤの植民地にした方がよいという考えと関係が深いと思われる。実際、ブランドは宰相ビスマルクに意見書を提出し、北海道は、その氣候・地味の点からも、ドイツ農民が開拓するのに最適であり、軍艦8隻、海兵隊員八千人でここを植民地化できると述べている。更に、戊辰戦争中の1868年7月31日、会津藩、庄内藩が軍資金と引き換えに北海道をその抵当に入れたいと申し出ている旨をビスマルクに打電している。しかし、プロシヤ側は、戊辰戦争の経過を見てからということ余り問題にしなかった。このようなドイツ側の植民主義的な関心から始められた収集がアイヌ関係コレクションの一つの契機となったが、余り大きな影響を及ぼすことがなかったのは事実である。

(3) ヨーロッパでの日本展示会とその影響

明治時代には、いくつかの日本展覧会がヨーロッパで催されている。明治政府は日本



写真5 ウィーン万国博覧会新聞 *Allgemeine Illustrierte Weltausstellungszeitung*（第4巻、第1号、p. 9, 1873年7月5日）に載った Raimund von Stillfried のアイヌ写真。ヨーロッパにおける最も古いアイヌの写真。たぶん胆振地方で写したもの。なお、パリの *Musée de l'Homme* に、同じ写真（番号 43.3175.173(1)E.849）が Cl. Berthémy という名前で保管されている。おそらく、Stillfried の横浜の写真館で買い求めたものと思われる。

の近代化の目覚ましさをヨーロッパの人々に誇示する為大いに力を入れた。ヨーロッパ側では、これらの展示会によって日本に対する関心が高められたのである。

a. ウィーン万国博覧会（明治6年，1873年）（写真4）

この博覧会では、明治政府は日本の文化をヨーロッパに紹介するために多大な努力を払った。その一環として、北海道開拓使がオーストリアの写真家で、ライムント・フォン・シュティルフリート (Raimund von Stillfried) 男爵を雇い、北海道での写真撮影を依頼している。シュティルフリートの写真は多くの数にのぼり、また彼が横浜で写真館を経営している折に、北海道で撮影した写真のガラスネガをもとにして、日本を訪れた多くの西洋人に絵葉書として販売したので、彼の写した写真がしばしば他人の名で出ていることがよくある(写真5)。ウィーン万国博覧会に出品されたアイヌ文化関係の物の中の57点は、雇人ワーグナー (Gottfried Wagener) の仲介でベリン民族学博物館に移され、現在でもなお46点が保管されている。日本では、上野の東京国立博物館と函館市立博物館にもその一部が現存している。

ウィーン万国博覧会での日本展示は、ヨーロッパ人を刺激し、ヨーロッパの日本人観の基礎を作り上げたので、その中にアイヌ文化の展示物も含まれたことが大きな意義があると思われる。

b. ベルリン国際漁業博覧会（明治13年，1880年）

この博覧会で展示されたものの中で、アイヌ関係の7点（模型ばかり）が後にベリン民族学博物館に入り、現存している。

c. ロンドン日英博覧会（明治43年，1910年）

日本帝国主義全盛時代に催され、日本帝国の国力の強さを誇示する意図が強くあった。ここでは台湾の蛮族とアイヌ人を実際に連れて行き、「アイヌ村」を再現させて展示した。このアイヌたちは日高地方の平取村のアイヌの人であった。ここで展示されたもののうち217点（現存143点）がイギリス各地の博物館、即ち、大英博物館 (Museum of Man)、ホルニマン博物館 (Horniman Museum)、リバプールやオックスフォードの Pitt-Rivers 博物館に残っている。

これらの展示会を通してヨーロッパの人たちにアイヌ文化が紹介された。ヨーロッパ人は、日本政府の意図に反して、近代化の目覚ましい日本の素晴らしさだけでなく、反対に「原始的」なアイヌにも強い関心を示した。この件はその後のアイヌ研究発展の大きな契機となった。

(4) 日本民族起源論に対する興味

大シーボルトは著作 *Nippon* の中で、日本民族アイヌ起源論に触れている。これに



写真6 明治43年ロンドンで開かれた日英博覧会での「アイヌの家を見学する」スケッチ。
(*The Illustrated London News* July, 9, 1910, p. 50)



写真7 地理学・地質学者 G. クライトナー Gustav Kreitner が日高・平取村のアイヌ人の家で、オーストリア皇帝の誕生日を祝う(明治10年8月18日)(G. Kreitner: *Im fernen Osten*, Wien 1881, p. 297 による)。

対して更に一般の興味を高めたのは、大森貝塚の発掘であった。この発掘調査を行ったのは、E. S. モース (Edward S. Morse) 教授と、大シーボルトの次男ハインリッ

ヒ・フォン・シーボルト (Heinrich von Siebold) 即ち小シーボルトであった。二人ともこの発掘調査によって同じ資料を手に入れたが、その解釈は正反対であった。

小シーボルトの解釈は、日本の貝塚時代の民族はアイヌであったというものである。その論拠として、アイヌ民族にも土器を使い、堅穴式住居に住み、石器を使っていた時代があったことを挙げている。アイヌ民族は、貝塚時代に北から南へと南下し、その後、大和民族に北に再び追いやられたとしている。

この見解はモースとは全く反対で、当時、東京新聞 (英文) 紙上で大論争が展開された。小シーボルトは自説を証明するため、ハンガリー調査団と一緒に来日したオーストリアの地質学者 G. クライトナー (Gustav Kreitner) 氏を供として、明治11年 (1878年) 日高地方平取まで調査に赴いている (写真7)。その際、考古学的な調査やアイヌ文化の資料収集を行い、のち、明治21年 (1888年) ウィーン帝立博物館に寄贈された巨大な日本関係コレクションの5,000点の中の81点 (現存71点) のアイヌ関係のものは、当時収集されたものと考えられる。このような日本民族起源に関する論争と、それに続く調査研究によって、アイヌは日本民族の起源であるということが強調され、このことは一般のアイヌに対する興味をさらに高めることになった。

この説を受けて、アイヌに関して多大な興味を示したのは、医学関係に従事する日本のお雇外国人 (その主な者はドイツ系の人) で、彼らは自然人類学的研究が必要であると。一例を挙げると、次の通りである。

- ① エルヴィン・フォン・ベルツ (Erwin von Bälz), 明治9-38年東大内科にて指導
- ② ハンス・ギールケ (Hans Gierke), 明治10-13年東大外科にて指導
- ③ ユーリウス・スクリーバー (Julius Scriba), 明治14-38年東大外科にて指導
- ④ ハインリッヒ・B・ショイベ (Heinrich Botho Scheube), 明治10-14年京都府立医科大学の創立者

スクリーバーとショイベは実際に北海道まで出かけて調査研究と収集活動を行い、そのコレクションはいまもドイツに現存している。

- ・ベルツ遺産 シュツットガルトのリンデン民族学博物館 (Linden Museum) (84点, 現存59点) 及び西ベルリン国立民族学博物館 (10点, 現存6点) に保存。
- ・スクリーバー氏 ダルムシュタットのヘッセン州立博物館に保存 (7点現存)。
- ・ギールケ氏 ベルリンに保存 (65点, 現存48点)
- ・ショイベ氏 ライプチヒ民族学博物館 (点数未確認) 及びハンプルク市立民族学博物館 (1点)

小金井氏は双方の論争を総合し、1903年にドイツ語で「日本の原住民について」という論文を発表した (*Über die Urbewohner von Japan, MOAG IX/3*)。小金井氏は「日本という国は元来アイヌの国であった」と結論づけていることはドイツの学界に徹底的な影響を及ぼして、長年の定説となった。こういう風潮の中でヨーロッパの各博物館は北海道関係の考古学的な資料を手に入れようとした。考古学的な資料としては、ブレーメン市立海外博物館 (*Übersee-Museum Bremen*) 館長シャウインストラント (*Hugo Schauinsland*) 氏は大正2～3年にかけて、80点以上の土器片や石器を直接北海道で購入している。これらは札幌の骨董屋から購入されたと思われる。この他にも、ニュールンベルク、フライブルク、ウィーンの各博物館にも考古学的なものが保管されている。

自然人類学的研究を進めるにあたり、ヨーロッパ人はアイヌの人骨を手に入れて調査研究をしたいと考えるようになった。その結果として、幾つかのアイヌ人の墓が掘り返され、それが日本でも大きな問題を引き起すまでに至った。ヨーロッパでは、現在およそ4体のアイヌの人骨が保存されている。一つは帝政ロシア海軍が樺太から持ち帰ったもの。二つ目は明治13年シュレジンガーとベーマー (*Schlesinger, Böhmer*) という二人のドイツ人が札幌農大にあった墓を掘り起し持ち帰ったものである。ベルリン大学の教授で、医学の権威ヴィルヒホフ (*Virchow*) がアイヌを人類学的に研究するには是非とも墓の発掘が必要であると、それを推し進めた。この他に、ブダペストとドレスデンにもアイヌ人骨が残されている。更に、オックスフォードのピット・リバス博物館 (*Pitt-Rivers Museum*) には、アイヌの毛髪と体毛のサンプルが保存されている。このような自然人類学的な研究は、一つの流行としての高まりを見せた。

こうした自然人類学的研究によって、従来とは異なった結果が出されるようになった。即ち、アイヌ人は日本人とは全く違う体形を持っており、むしろアイヌ人は古代ヨーロッパ人と比較しうるのではないかということであった。

文化人類学の一つの証明として、アイヌの熊祭りを取り挙げ (写真8)、ヨーロッパでも旧石器時代には、アルプスにある洞窟の発掘でも示されるように、熊が崇拝されていたことがわかる。このような学説の代表の一人がウィーン学派 (歴史民族学) の権威 W. コッパース教授 (*Wilhelm Koppers*) であった。又、小金井氏をはじめとする日本におけるアイヌ研究と、コッパース教授の研究を結びつける役割を果たしたのは岡正雄先生であった (写真9)。昭和6年アイヌを取り挙げ、*“Ursprung der Gottesidee”* (「神観念の起源」) を発表した W. シュミット (*Wilhelm Schmidt*) は、

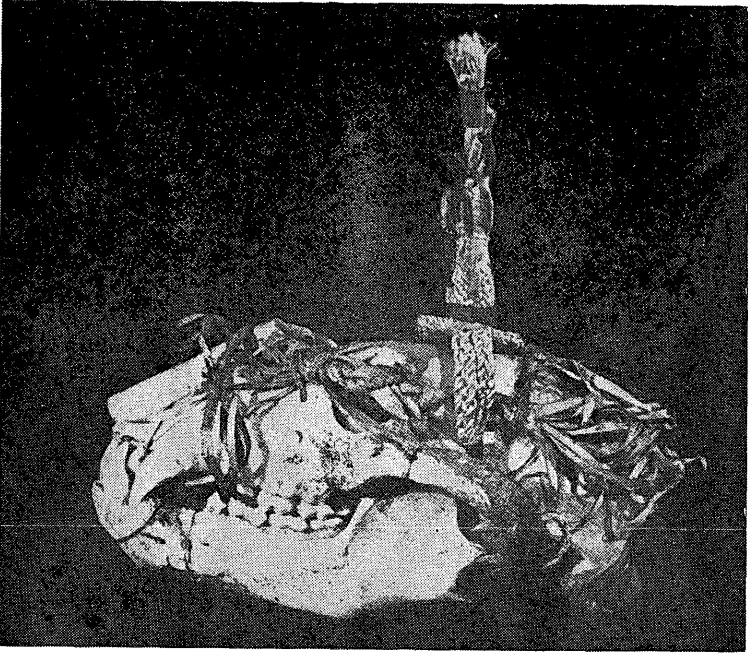


写真8 東ドイツ・ライプチヒ民族学博物館に保管されている樺太アイヌの熊の頭 (H. Scheube コレクション, OAS 5162)。飾りはまったく関係なく、後につけられたものである。(B. Pilsudski コレクション, 当時 St. Petersburg=レニングラード博物館から交換されたもの, OAS 3178)。[Hans-Joachim Paproth: “Über einige Bärenkultobjekte des Museums für Völkerkunde zu Leipzig”; *Jahrbuch des Museums für Völkerkunde zu Leipzig*, Vol. 27, 1970, pp. 320–351, Tafel 76, Abb. 6]



写真9 昭和27年ウィーン大学で開かれた国際人類学民族学大会の開会式で。すわっている人物：右から, W. Koppers, W. Schmidt, 岡正雄の諸先生。

その中で、アイヌは大変古い文化を保有し、ヨーロッパの旧石器時代の文化を継承していると述べている。彼の論拠も、小金井氏の資料を基にしている。

このような研究結果が出されるようになると、ヨーロッパ人はアイヌ人に対する親しみを感じるようになった。そして、アイヌ人はヨーロッパ人の昔そのままの文化を保持している、古代ヨーロッパ人の姿がそこに残されている、自分たちの祖先の生きた文化を見る事が出来るという一つの定説が出来上がった。そして、日本政府に対してアイヌ差別を批判する動きが起ったりした。当時、日本が国際舞台に姿を現わし、かつ日露戦争での勝利は、ヨーロッパ人にとり衝撃であった。そこで、アイヌ人は日本民族の起源だけではなく、ヨーロッパ民族の古い姿を保っていると考えることによって、日本の勝利を納得する事が出来たのではないと思われる。第二次大戦中のドイツにおいても、ゲルマン民族の優越性を誇るドイツとアジア民族国家日本との同盟を正当化するため、日本民族は元来ゲルマン民族である事を証明する為にアイヌ民族を強調した。ちょうど昭和10年代に独語で書かれているアイヌ関係文献が増える事と重なり合っている。

アイヌ人はヨーロッパ人にとって親しみのある民族となり、明治中期から昭和にかけて日本を訪れるヨーロッパ人は、何かしらのアイヌ関係資料を手に入れ持ち帰った。

例を挙げると、第一は国賓として訪日した人たちで、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナンド・フォン・エステ (Franz Ferdinand von Este) が明治23年訪日した際持ち帰ったものの中の2点がアイヌのものであった (現在ウィーン国立民族学博物館に保存)。昭和10年代に日本を訪れた、当時シカゴ市長チャルマック (Čermak) 氏が持ち帰り、母国チェコスロバキアに寄贈されたものが現在プラハ国立民族学博物

表4 ケルン市立ラウテンシュトラウフ・ヨースト民族学博物館のアイヌ・コレクション

		目録上 標本数	現 存 ない し 確 認
1.	Wilhelm Joest W. ヨースト	明治32年 20点	16点
2.	W. ヨースト	// 34年 2点	2点
3.	友の会寄贈 (ラムラウフ社から購入)	// 43年 220点	179点
4.	不 明	大正以前 2点	2点
5.	Herbert von Dirksen ディルクセン元大使	昭和25年 2点	2点
6.	Kloebe クレーベ夫人	// 28年 1点	1点
計		247点	202点

表5 プロシャ文化財団ベルリン民族学博物館のアイヌ・コレクション

		目録上 標本数	現 存 ないし 確認
1. Max von Brandt M・フォン・ブランド	明治 元年	52点	38点
2. ウィーン万博	// 7年	57点	46点
3. Websky ウエブスキー氏	// 8年	5点	0点
4. 日本政府/ベルリン国際漁業博覧会	// 13年	7点	7点
5. Georg Schlesinger シュレジンガー氏	// 14年	16点	12点
6. Hans Gierke ギールケ博士	// 14, 27年	65点	48点
7. Wilhelm Joest W・ヨースト教授	// 15, 28年	47点	39点
8. Adrian Jacobsen ヤコブセン船長	// 17, 18年	172点	129点
9. Wilhelm Hoehn ヘーン未亡人	// 26年	17点	12点
10. Paul Ehrenreich エーレンライヒ氏	// 27年	65点	51点
11. シーボルト遺品	// 29年	26点	24点
12. Eugen Wolf ウォールフ氏	// 32年	6点	5点
13. Adolf(?) Fischer フィッシャー氏	// 34年	13点	8点
14. Rex レックス社	// 35年	6点	4点
15. Schoede シェーデ氏	// 40年	190点	155点
16. Frh. von Ritter フォン・リッター氏	// 45年	10点	9点
17. ベルツ遺品	大正 3年	10点	6点
18. その他		19点	15点
計		783点	608点

館 (Nåprstek Museum) に1点保管されている。更に、昭和29年にプリンツ・ペーター（ギリシャとデンマークの王子 Prince Peter）が北海道・日高地方の静内に行き、求めたもの16点が現在コペンハーゲン国立博物館に残されている。

第二はお雇い外国人たちが持ち帰ったものである。ベルリンの警察官であったヴィルヘルム・ヘーン (Wilhelm Höhn) 氏は、明治18年から明治24年にかけて日本で警察制度の整備の指導に当たった。明治22年9月東北地方視察旅行の際、二週間の休暇をとり、個人的に青森から北海道に渡り、石狩、空知地方でアイヌに関するものを収集した(写真20)。ヘーン氏はドイツに帰国後まもなく死亡し、遺品は売却されて、ベルリン国立民族学博物館に17点(うち12点は現存)、マールブルク大学民族学研究所に

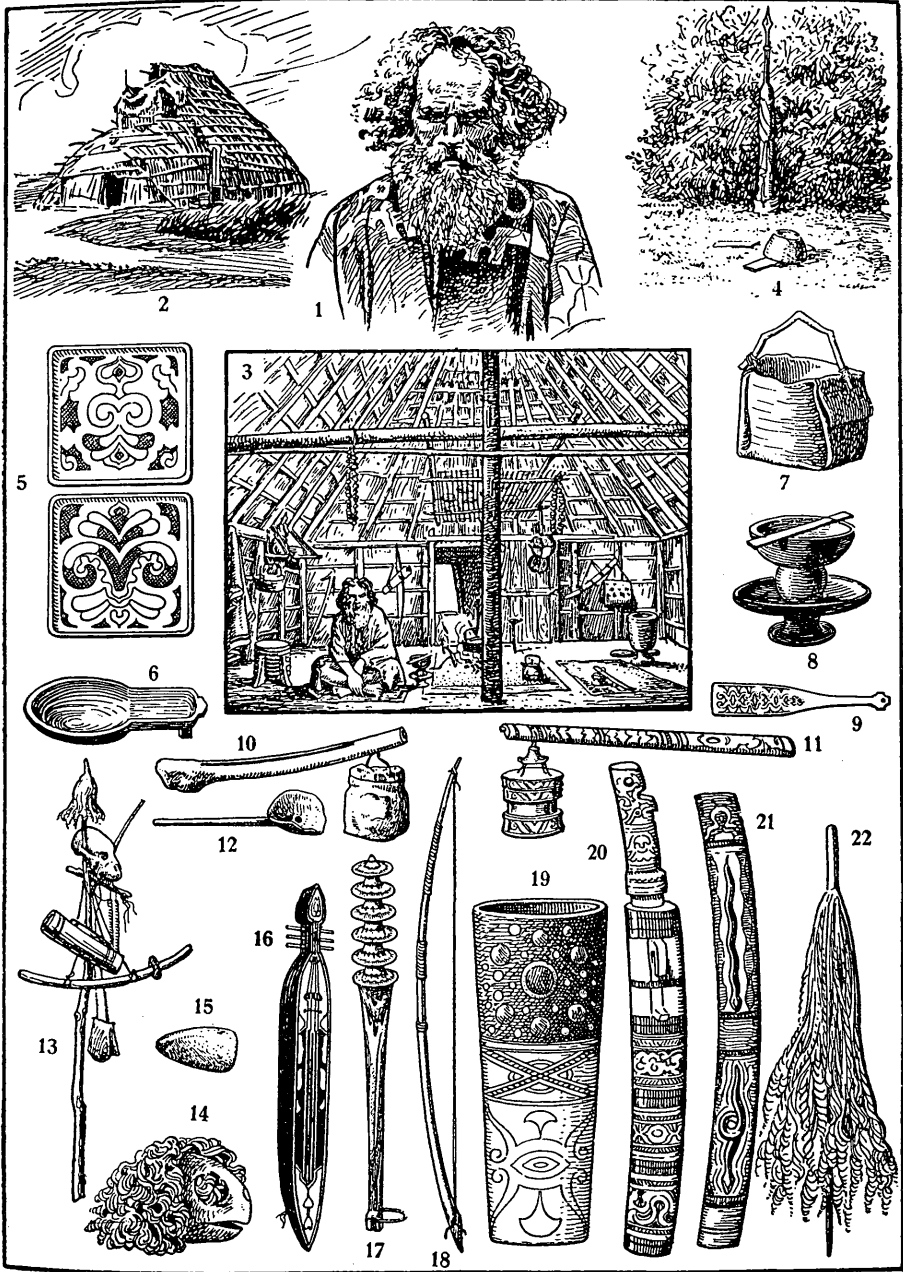


写真10 R. Karutz: *Atlas der Völkerkunde, Die Völker Nord- und Mittelasiens*, Stuttgart, 1925, p. 13: アイヌ文化に関する図録。



写真11 ハンブルクの骨董屋ウムラウフ社の創立者 Johan Friedrich Gustav Umlauff 氏。

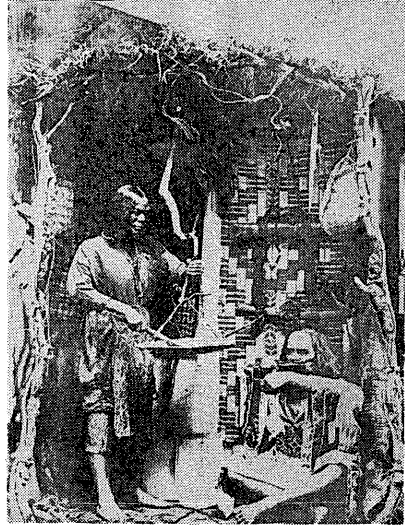
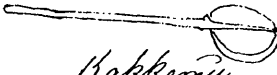



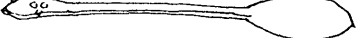
写真11' ウムラウフ社「博物館」目録の表紙。おそらくハンブルク市レーパーバーン街にあったいわゆる「ウムラウフ博物館」に展示されたアイヌ・コーナーの写真。
[ケルン民族学博物館所蔵]

Handwritten entries from a catalog, including German and Ainu descriptions of tools and items, with illustrations of spoons and a bowl.

352 Keffel Holz aus Gröfze mit Spitzgeri Norgard
Kakkomu

353 Holzspöfzel aus Holz  Kakkomu

354 Holzspöfzel a. Holz  Imetkippe

355 Holzspöfzel  Sprowupe

356 diko isfulij serigun " "

357 diko " " " "

358 diko " *Spitzgeri Holz* " "

359 Holzspöfzel der Gröfze mit reifer Spitzgeri Norgard.

写真12 ウムラウフ社のアイヌ文化関係営業用帳簿の一部。品名はドイツ語及びアイヌ語で記録されている。アイヌ語名はおそらく収集現地で記録された——「何でもない古いもの」は、fushikoanpe として書きとめたこともある。

35点(うち26点アイヌのものとして確認)、リューベック市立民族学博物館に1点(これは後ベルリン国立博物館から移された)渡った。また、他にも、東京大学言語学研究室の創立者であるバジル・ハル・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)教授が明治25年北海道で収集した124点(41点現存)をオックスフォードのピット・リヴァース(Pitt-Rivers)博物館に寄贈している。更に、東北大学医学部で指導に当たっていたアショッフ(Ludwig Aschoff)教授が大正時代に集めたものが、フライブルグに21点残っている。

第三は、一般旅行者によって集められたものである。例えば、英国軍人コルタード(Coltard)氏が昭和10年札幌を訪れた際、アイヌ研究者であるバッチェラー(John Batchelor)から27点(20点現存)をもらい受け、それをオックスフォード博物館に寄贈している。又、こういう例は他にも幾つか挙げる事ができる。

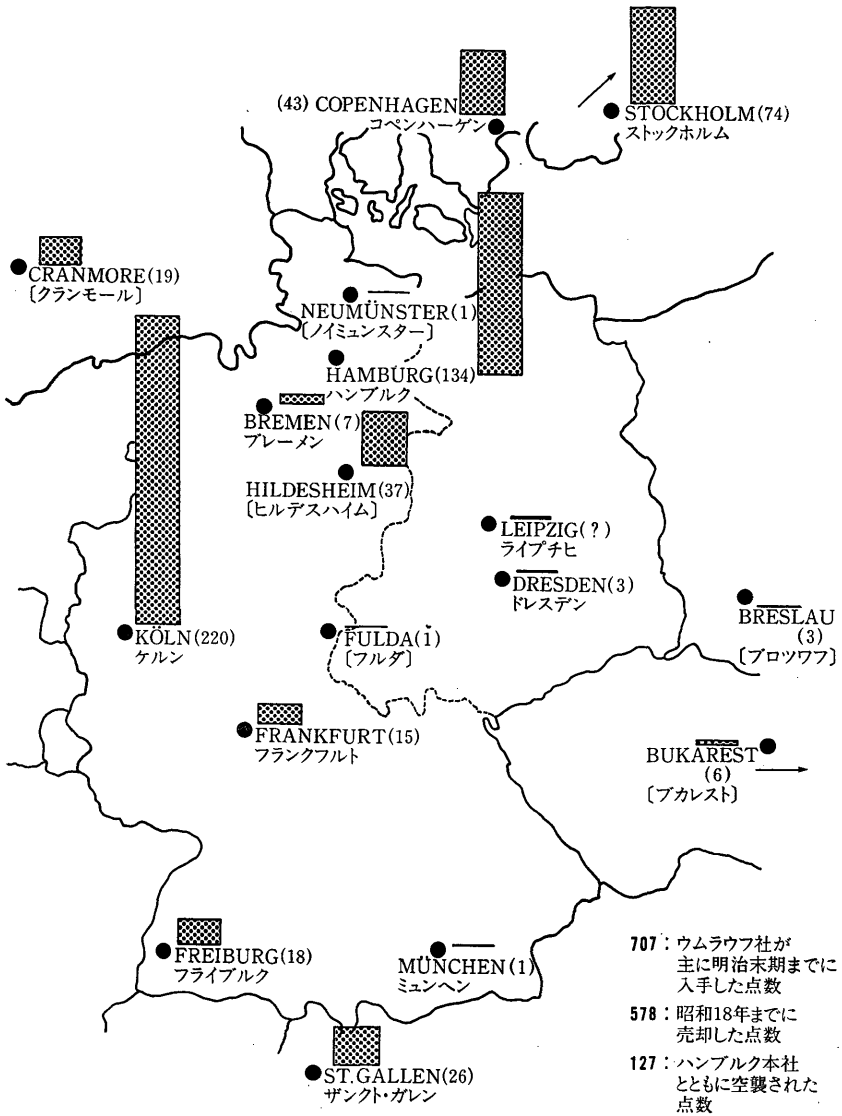
(5) 博物館による体系的収集

アイヌに対して一般的興味が高まるにつれて、以上に述べたように様々なルートを通じてアイヌ・コレクションがヨーロッパの博物館へ集まってきた。そうすると、今度は博物館が体系的にアイヌ・コレクションの収集に乗り出すようになった。このような一つのサイクルが出来上がり、一般の関心が高まるにつれて、アイヌ・コレクションが一層の充実を見るようになった。

博物館がコレクションを収集する方法の一つは、ヨーロッパの骨董屋から購入することであった。当時の主な骨董屋を挙げると、以下の通りである。



写真13 ヒルデスハイム Hildesheim 市立レーマー Römer 博物館の「日本原住民族」アイヌ展示コーナー。昭和10年代ごろ。資料はすべてウムラウフ社から購入されたもの。第二次大戦中空襲により焼失。[同博物館所蔵の古絵葉書]

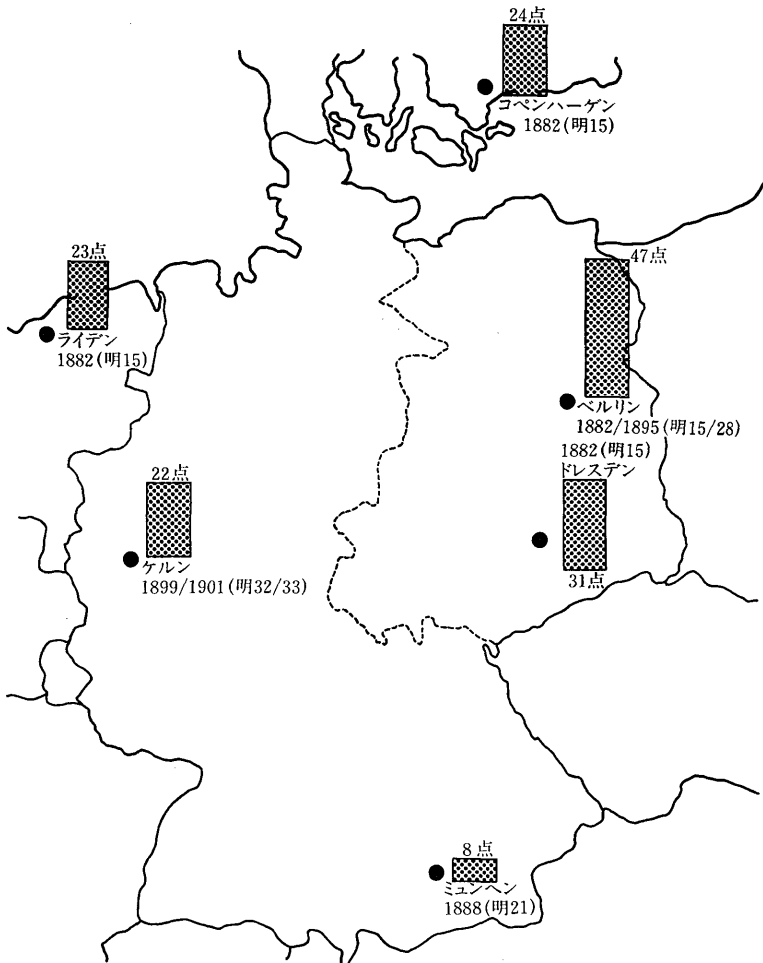


[] 現存しないもの

地図3 ウムラウフ社を通じてアイヌ・コレクションを購入した博物館

- ・レックス (Rex) 社, ベルリン: 1902年ベルリン国立博物館に6点 (4点現存) を売却
- ・コニーツコ社 (Konietzko), ハンブルク: 1点ずつをミュンヘン民族学博物館とドイツ博物館 (Deutsches Museum) に売却

- ・ランゲヴィース社 (Langewis), オランダ・ツァーンダム市：現在も営業されている。パーセル, チューリヒ (ともにスイス), ライデン, アムステルダム (ともにオランダ), コペンハーゲン国立博物館, スウェーデンのゲーテボルヒ及びストックホルム国立民族学博物館等に主に織物を売却
- ・レメール社 (Lemaire), オランダ・アムステルダム市：マールブルク大学, チューリヒ大学民族学博物館に売却
- ・ウムラウフ社 (Umlauff), ハンブルク：明治末期から昭和初めまでの間に, ヨーロッパの各地の博物館に売却したものは総計 578 点にもぼっている (写真 11~13, 地図 3)。



地図 4 W. ヨースト氏のアイヌ・コレクション (明治14年北海道で入手)



写真14 Otfried von Hanstein: *Unter dem Sonnenbanner; Reise-Erzählungen aus dem fernen Osten* (日の丸の下で—東洋の旅行紀行), 第5巻 *Von Tokyo zu den Waldmenschen von Yezo* (東京から蝦夷の森の民へ), Leipzig 1921, p. 192 に載っている絵。G. Kreitner: *Im fernen Osten* (Wien 1881) のスケッチに多少似ている。

もう一つの方法は、博物館自ら調査団あるいは探検員を派遣し、現地調査・収集に当らせる事もあった。この場合には、体系的に収集が行われ、製作者、製作地等の詳しい資料が整理されており、学問的意義の高いものであった。一例として、

- ・ヴィルヘルム・ヨースト (Wilhelm Joest) が明治13年から14年にかけて北海道で収集したものの(写真15及び地図4を参照)。
- ・ベネディクト・バロヒュ・フォン・バラトシュ (Benedikt Balogh von Baràthos, ハンガリー) は東北アジア諸民族の研究家で、北方圏諸民族の文化研究のために、カナダ・アラスカ・東北シベリア・樺太・北海道を回る大規模な探検旅行を企画し、ブタペスト国立博物館及びハンブルク市立民族学博物館の資金援助を受け、大正2年から

3年にかけてそれを実行した。彼は膨大な数の資料を集め持ち帰ろうとした時、第一次大戦の開戦に遭い、収集したものは横浜税関に一時差し押えられた。大正10年になってようやくヨーロッパに持ち帰ることができたが、経済不安の関係でコレクションは大正15年ごろブタペストとハンブルク両博物館に分けられた。

アイヌ関係コレクションの収集に特に力を入れた博物館には、次のようなものがある。

- ・ベルリン国立博物館：明治17年から18年にかけてヤコプセン船長 (Adrian Jacobsen) は自分の船で東アジアの沿岸を北上し、172点 (129点現存) の樺太アイヌのものを収集した。他にも、明治48年シェーデ (Schoede) 氏が札幌を



写真15 W. ヨースト氏 (Prof. Dr. Wilhelm Joest) [Richard Andree: "Wilhelm Joest", p. 47, *Globus* 73: 46-48, 1898.]

No. 80. { 根イ } Mei (Japanese calligraphy)
 No. 81. { 根イ } Inao (Inui's calligraphy)
 A few pieces of willow, lilia and other wood which are stuck in the ground as offerings to the gods.
 No. 82. { 茶子 } Chanomi (Japanese calligraphy)
 A cup.
 No. 83. { 冠 } Kanmuni (Japanese calligraphy)
 No. 84. { 冠 } Inaori (Inui's calligraphy)
 A hat which is used by men.
 No. 85. { 刀 } Katama no Tsuba (Japanese calligraphy)
 No. 86. { 刀 } Seppa (Inui's calligraphy)
 A sword hilt.

写真16 ベルリン国立民族学博物館所蔵の Schoede シューデ・コレクションに関する調査ノート：資料番号の次に漢字と片仮名とローマ字による日本語名及び片仮名とローマ字によるアイヌ語名が記入されている。

訪れ収集した190点 (155点現存) には、アイヌ語の名称リストまで記録されている (写真16参照)。

- ・バチカン博物館：昭和3年、札幌にあった聖フランシスコ修道会は、アイヌ関係のもの18点を法王に送る。
- ・パリ人類学博物館 (Musée de l'Homme)：大正8年に北海道、樺太を訪れたジョージ・モンタンドン (George Montandon) が持ち帰った115点 (現存82点) は、昭和8年に博物館に収められた。既に明治33年 (1900年) から P. ラベール (Paul Labbé) のコレクションの61点 (現存59点) がパリにあった。

ヨーロッパの博物館では、集められた資料をもとに、アイヌに関する展示会が数多く催された。戦火に遭ったヒルデスハイムのレーマー博物館 (Römer Museum) での展示の風景が絵葉書として残っている (写真13)。このような展示会を通じて、更に一般市民の関心が高められ、その関心がまた物の収集へと向っていった。大正時代からドイツでは、アイヌ民族の名は一般市民にまでよく知られるようになり、クロスワード・パズルにまでその名が出てきた。大衆小説にもアイヌが題材として取り上げられ、例えば大正10年にライプチヒで出版された、オトフリート・フォン・ハンシュタ

イン (Otfried von Hanstein) の日露戦争直前の日本を舞台としているスパイ小説などがある (写真14)。

Ⅳ 各博物館に収められているアイヌ・コレクションの性格……二、三の実例

1. ケルン市立ラウテンシュトラウフ・ヨースト (Rautenstrauch Joest Museum) 民族学博物館

この博物館は明治33年、民族学者であった W. ヨースト (写真15) のコレクションを基礎として設立された。ヨーストの未亡人であるアデーレ・ヨースト (Adele Joest) が夫の思い出として彼のコレクションを、そして未亡人の実家であるケルンの資本家オイゲン・フォン・ラウテンシュトラウフ (Eugen von Rautenstrauch) 氏が博物館

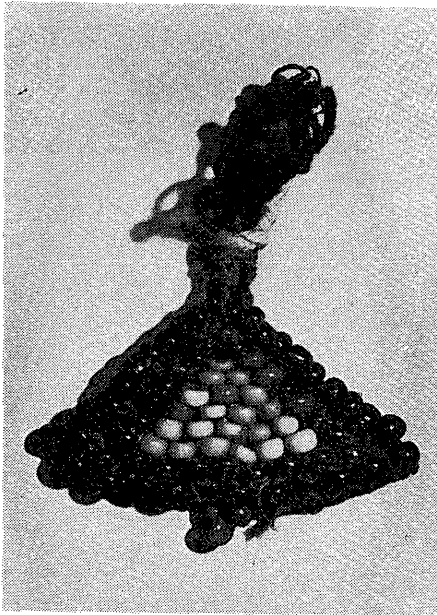


写真17 ケルン市立民族学博物館；樺太アイヌ、男子の子供の前髪の飾りホヒュチリ (ウムラウフ社から購入コレクション; 25.307)。同じものはウィーン国立民族学博物館にも保管されている (1899年の A. ダットン・コレクション, 64.086)。日本には残っていない貴重なもの。

の建物を、ケルン市民に寄贈し設立されたものであった。歴史民族学の祖とも言われている偉大な学者であった W. フォイ (Wilhelm Foy) 及び F. グレーブナー (Fritz Graebner) が初代そして二代目館長を勤めている。現在この博物館は全部で約5万点のコレクションを持ち、主にインドネシア関係の資料が中心となっている。インドネシア以外のアジア関係は約5,000点で、その中に247点のアイヌ・コレクションが含まれている。そのうちヨースト氏が収集したものは22点である。ヨーストは明治14年に北海道を訪れ、多くのものを収集してきたが、この博物館にはその名称にもかかわらず、ヨースト氏のものはいくつか少ない。(地図4を参照)。ヨースト・コレクションの分布地図からも分かるように、ケルンの他にベルリン47点(39点現存)、ドレスデン31点

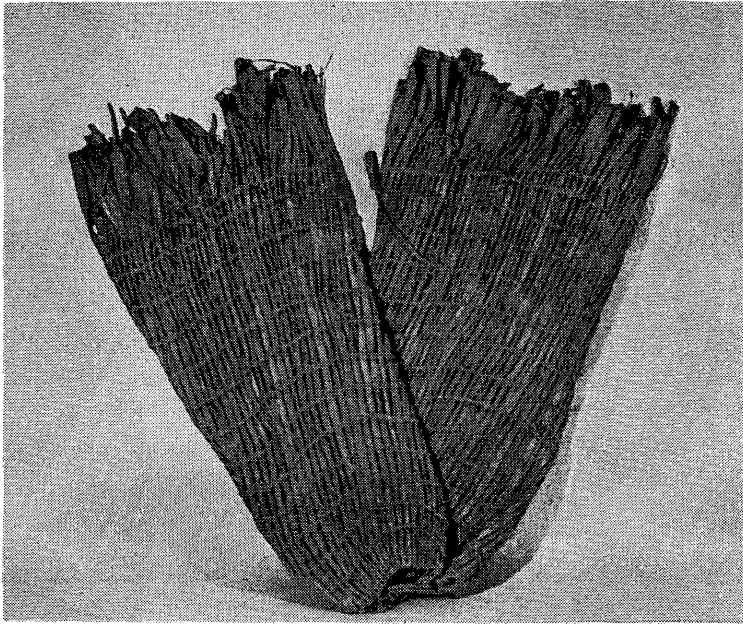


写真18 ブダペスト国立民族学博物館，樺太アイヌの靴下ケロムンペ (B. Balogh von Baràthos コレクション；128,796)。同じものは他にブレーメン海外博物館 (A. フリツェ・コレクション A119) 及びケルン (ウムラウフ・コレクション 25.336/7) でも保管されている。日本には白老や函館に一足ずつしかない。

(24点現存)，コペンハーゲン24点 (23点現存)，ライデン23点 (23点現存)，ミュンヘン8点 (8点現存) とヨーロッパ各地に分散している。

ケルン市立ラウテンシュトラウフ・ヨースト民族学博物館には，ウムラウフ社から購入されたものが220点にのぼっている。このウムラウフ社は明治39年，北海道及び樺太から総計707点のアイヌ民族文化のものを手に入れ，ヨーロッパ各地の博物館に売却している (写真11-12，地図3) が，これらはどういうルートで入手されたかは不明である。このウムラウフ社のコレクションを見ると，専門家でないと集められないような素晴らしいもの (写真17，18) が多いことがわかる。この700点にものぼるコレクションは，ポーランド人でアイヌ研究家 B. ピウスツキ (Bronisław Piłsudski) の手によって集められたのではないかと想像されるくらい素晴らしいものである (岡田路明氏教示)。

ウムラウフ社コレクションの分布図にみられるように，ケルン220点，ハンブルク105点，ストックホルム74点，コペンハーゲン43点等，ヨーロッパ各地に分散している。ヒルデスハイム (写真13) とブレスラウでは戦火に遭い焼失し，またウムラウフ社の倉庫に残っていた127点は，昭和18年夏ハンブルク大空襲の際に焼失してしまっ

た。イギリスの元クランモア博物館 (Cranmore Museum) にあったものは、大正時代コペンハーゲンとの交換によってデンマークに移された。この他、ドイツ・フルダ宣教師協会とノイミュンスター織物博物館、及びルーマニア・ブカレストに保管されているものは、まだ確認していない。

ヨーロッパの各博物館についても言えることだが、ケルンに集められている主な物は、第一次大戦前に収集されており、第二次大戦後では、一外交官などによる寄贈が数点あるのみである。これは両大戦による時代の変化で、資本家層が没落していった結果と考えられる。このラウテンシュトラウフ・ヨースト民族学博物館は戦時中疎開もされず、戦火をも免れたので、完全な形で残っている。244点中、202点の確認ができた。

2. ベルリン・プロシャ文化財団ベルリン民族学博物館 (元国立民族学博物館)

歴史民族学の祖といわれるアドルフ・バスチアン (Adolf Bastian) によって1873年に設立され、元プロシャ王立宝物室にあったコレクションがここに移された。初代館長はヴィルヘルム・グルーベ (Wilhelm Grube) で、彼は東北アジア及びアイヌに深い関心を持っていた。1908年、日本研究家であったミュラー (F. W. K. Müller) がグルーベの後を継いで二代目館長となった。この二人が日本に強い関心を持っていたこともあって、アイヌ・コレクションはヨーロッパ各地の博物館に比べて数も多く、内容も充実している。戦時中は戦火を避けて疎開され、戦後の1970年に、西ベルリンにあるダーレムに新築された近代的な博物館に収められた。ここは博物館としての機能を十分に備えている。

ここに収められている日本関係コレクション3,000点のうち783点がアイヌ関係のもので、その中の608点が確認できた。残りは紛失していると思われる。コレクションが博物館に収められた年代順に整理すると、一番古いのはブラントが慶応年間に収集したものが明治元年に収められ、明治7年には、ウィーン万博に展示されたもの57点が、そして明治13年にベルリン漁業博覧会の展示品7点が収められている。体系的に集められたものとしては、明治14年にヨーストが収集したもの、またノルウェーの探検家であるヤコプセン船長が、ウムラウフ社のためにアジア沿岸を回り収集したものがあり、ヤコプセン船長の172点は樺太のものである。他にも、民族学者であったシェーデが明治40年北海道で集めたものは、一点毎に詳しい資料が付けられている (写真16)。

これらのコレクションは第一次大戦前に収集されたもので、他にも一般旅行者やお雇い外国人等の寄贈によるもの、また遺品として収められているものもある。全体と

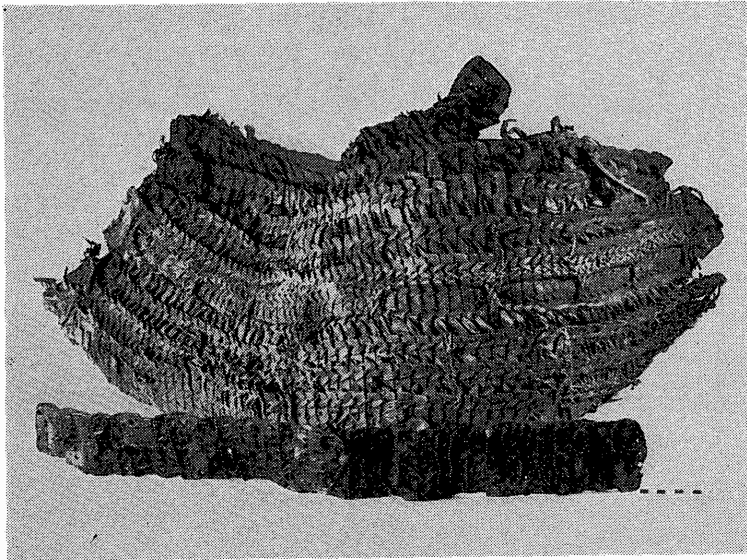


写真19 ハンブルク市立民族学博物館蔵のアイヌの鎧 (B. Balogh von Baràthos コレクション; 28-26-213)。非常によく残っているもので、東北大学と東京国立博物館のそれぞれの鎧と並ぶもの。

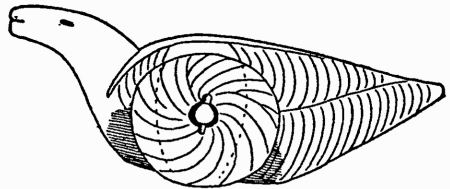
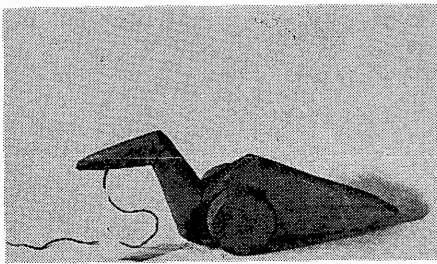


FIG. 1.

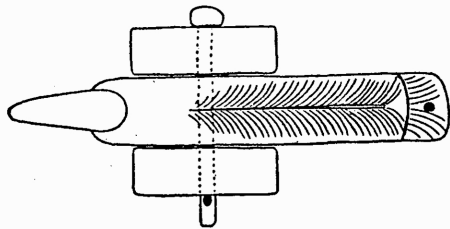


FIG. 2.

写真20 ベルリン国立民族学博物館蔵のアイヌのおもちゃ。たぶん空知地方 (Wilhelm Höhn コレクション; IA-5064) 及び E. Morse: "A Curious Aino Toy", *Bulletin of the Essex Institute*, Vol. 35, p. 1 (1892) に見られる松浦武四郎収集の中の石狩アイヌのおもちゃの図。たいへんめずらしい例。

して言えることは、北海道アイヌと樺太アイヌのものが半々ずつで、半分弱のものが体系的に収集されたものである。

V ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクションの特色

ヨーロッパにおけるアイヌ・コレクションを調査してみて、次のような特色を指摘することができると思う。

① ドイツ語圏に圧倒的に多い。この事はアイヌ研究に対する一般的な興味が高い事と並行している。この一般的な興味の主眼は、主に、アイヌは日本の原住民ばかりでなく、旧石器時代の古代ヨーロッパ人の生活・文化を残している古い民族文化を保持しているという歴史民族学の学説から生まれた。これに比べて他の国では一段と少なくなる。

② コレクションは第一次大戦前に収集されたものが多い。第一次大戦前には個人の経済力を背景とした教養旅行の習慣があり、その際集められた物が多く寄贈されている。戦後、この経済的バックボーンが失われるという社会変化によって、その後収集されたものは一段と少なくなった。またアイヌに対する興味が高かった事にもよっている。第二次大戦後は、専門家による収集だけが少々続いているにすぎない。

③ 日本のアイヌ・コレクションと比較して、ヨーロッパには時代的に古い物が数多く存在する。大シーボルトやブロムホフのコレクションは、その一例である。小シーボルトはじめ明治時代の学者・旅行者がそれに続く。

④ 樺太アイヌのコレクションが多い。ヨーロッパに残されている物の半数以上が、樺太アイヌのものである。これは、日露戦争前の樺太は帝政ロシア領であったため、ヨーロッパ人が比較的頻繁に調査に出かけたためであろう。北海道アイヌの物に関しては、人口密度が高い胆振、日高地方のものが多い。千島アイヌのものは極めて稀で、ベルリン、ライデンとパリに現存するのみである（写真1）。

⑤ 多くのコレクションに詳しい資料が添付されている。中には方言の名称も書かれており、またコレクションの幅の広さから言っても非常に貴重な資料である。アイヌ研究には欠かせない資料が多く、これらは同時に、日本ではもはや分らなくなっているものを明らかにするのに役に立つと思われる（写真1, 2, 17-20）。

表6 ヨーロッパ各博物館保管のアイヌ・コレクション

国/博物館	目録上 標本数	現 存 し ない 確 認
1. ドイツ連邦共和国 (西ドイツ)		
1. Berlin, Museum für Völkerkunde ベルリン国立民族学博物館	783点	608点
2. Bremen, Überseemuseum ブレーメン市立海外博物館	274点	228点
3. Darmstadt, Hessisches Landesmuseum ダルムシュタット, ヘッセン州立博物館	7点	7点
4. Frankfurt, Museum für Völkerkunde フランクフルト市立民族学博物館	108点	68点
5. Freiburg, Museum für Völkerkunde フライブルク市立民族学博物館	82点	73点
6. Fulda, Franziskaner-Missionsverein フルダ, 聖フランシスコ伝道協会	1点	0点
7. Göttingen, Institut und Sammlungen für Völkerkunde der Universität ゲッチングゲン大学民族学研究所附属コレクション	1点	1点
8. Hamburg, Museum für Völkerkunde ハンブルク市立民族学博物館	795点	771点
9. Heidelberg, Völkerkundemuseum der J. und E. von Portheim-Stiftung ハイデルベルク, J. と E. ポルトハイム財団民族学博物館	5点	5点
10. Hildesheim, Römer-Museum ヒルデスハイム, 市立レーマー博物館	37点	0点
11. Kiel, Museum für Völkerkunde der Universität キール大学民族学博物館	3点	2点
12. Köln, Rautenstrauch-Joest-Museum für Völkerkunde ケルン市立民族学博物館	247点	202点
13. Krefeld, Deutsches Textilmuseum クレーフェルト, ドイツ織物博物館	1点	1点
14. Lübeck, Museum für Völkerkunde リューベック市立民族学博物館	46点	6点
15. Mannheim, Völkerkundliche Sammlungen im Reiss- Museum マンハイム市立ライッス博物館民族学部門	2点	2点
16. Marburg, Völkerkundliche Lehrsammlung des Völker- kundlichen Seminars der Philipps-Universität マールブルク大学民族学研究所附属コレクション	36点	27点
17. München, Deutsches Museum ミュンヘン, ドイツ博物館	2点	2点
18. München, Staatliches Museum für Völkerkunde ミュンヘン, バイエレン州立民族学博物館	77点	74点
19. Haus Neuerburg ノイアーブルク・コレクション	4点	0点
20. Neumünster, Textilmuseum ノイミュンスター, 織物博物館	1点	0点
21. Nürnberg, Naturhistorische Gesellschaft ニュールンベルク, 自然科学協会	2点	2点
22. Stuttgart, Linden-Museum シュトゥットガルト, 州立リンデン博物館	164点	132点
1a. ドイツ民主主義共和国 (東ドイツ)		
1. Dresden, Staatliches Museum für Völkerkunde ドレスデン, 国立民族学博物館 ¹⁾	93点	56点

国/博物館	目録上 標本数	現 存 し 認 確
2. Leipzig, Museum für Völkerkunde ライプチヒ, 民族学博物館	?	5+α点
1b. 現ポーランド統治下		
1. Breslau ブロッツフ	3点	0点
2. オーストリア		
1. Wien, Museum für Völkerkunde ウィーン, 国立民族学博物館	230点	200点
2. Wien, Institut für Japanologie der Universität ウィーン大学日本文化研究所付属コレクション	10点	8点
3. スイス		
1. Basel, Museum für Völkerkunde バーセル国立民族学博物館	73点	70点
2. St. Gallen, Historisches Museum ザンクト・ガレン市立歴史博物館	67点	54点
3. Zürich, Museum für Völkerkunde チューリヒ大学付属民族学博物館	76点	59点
4. オランダ		
1. Amsterdam, Museum voor de Tropen アムステルダム熱帯博物館	3点	3点
2. Leiden, Rijksmuseum voor Volkenkunde ライデン, 国立民族学博物館	167点	157点
5. デンマーク		
1. Aabenraå Museum アーベンロー博物館	2点	2点
2. Århus, Forhistorisk Museum Moesgaard オーフース, モェスガート先史博物館	126点	126点
3. København, Nationalmuseet コペンハーゲン, 国立博物館	112点	110点
6. ノルウェー		
1. Universiteti Oslo, Etnografisk Museum オスロ大学付属民族学博物館	36点	32点
7. スウェーデン		
1. Göteborgs Etnografiska Museum ゲーテボルヒ, 民族学博物館	6点	6点
2. Stockholm Etnografiska Museet ストックホルム, 民族学博物館	420点	420点
8. ポーランド		
1. Kraków, Muzeum Etnograficzne クラクフ, 民族学博物館	1点	1点
9. チェコスロバキア		
1. Praha, Náprstek Museum プラハ, ナプリステク博物館	1点	1点
10. ハンガリー		
1. Budapest, Ferenc-Hopp Museum ブダペスト, フェレンチ・ポップ東洋美術館	14点	11点
2. Budapest, Neprajzi Múzeum ブダペスト, 国立民族学博物館	313点	158点

国/博物館	目録上 標本数	現 存 ない し 認
11. ルーマニア		
1. Bukuresti, Nationalmuseum ブカレスト, 国立博物館	6点	0点
12. イタリア		
1. Firenze, Museo Nazionale di Antropologia e Etnologia フィレンツェ, 国立人類学・民族学博物館	498点	498点
13. バチカン市国		
1. Monumenti, Musei e Gallerie Pontifice, Museo Missionario 法王立博物館, 伝道博物館	29点	26点
14. フランス		
1. Besançon ベサンソン	?	2+ α 点
2. Paris, Musée de l'Homme パリ, 人類学博物館	182点	142点
15. イギリス		
1. Cambridge, University Museum of Archaeology and Anthropology ケンブリッジ大学付属考古学人類学博物館	8点	8点
2. Edinburgh, The Royal Scottish Museum エディンバラ, スコットランド王立博物館	138点	137点
3. Exeter, Royal Albert Memorial Museum エクセター, 王立アルバート記念館	18点	18点
4. Liverpool, Merseyside County Council リバプール, マーセイサイド郡博物館	81点	76点
5. London, British Museum-Museum of Mankind ロンドン, 大英博物館-人類博物館	245点	220点
6. London, Horniman Museum and Library ロンドン, ホーニマン博物館	47点	8点
7. London, Victoria and Albert Museum ロンドン, ビクトリア・アンド・アルバート美術館	1点	1点
8. Oxford, Pitt-Rivers-Museum オックスフォード, ピット・リバス博物館	322点	147点

1) 白老民族資料館の岡田路明氏の調査による

謝 辞

当報告は昭和60年9月北海道大学で行われた国際シンポジウム『B. ビウスツキ古蠟管とアイヌ文化』における特別公開講演の内容をもとにして書き直した中間報告である。北海道大学の朝倉利光教授, 村崎恭子教授, 岡田宏明教授に感謝の意を表わすとともに, 調査研究の援助をして下さったドイツ学術振興会 (DFG) とトヨタ財団にも, ここに改めて感謝の言葉を述べる次第である。この調査研究にはボン大学助手の Hans-Dieter Ölschleger と Michael Stöver が最初から参加し, 白老アイヌ民族博物館学芸員岡田路明氏にも判定段階で四ヶ月協力していただいた。

また, ヨーロッパ各博物館の責任・担当者の方々にお世話になったことも合わせて感謝いたします。